

「ヤドリコテライゾナ」―他人に依存する禍

解説

イゾナ科

危険度：★★★★☆

生息数：★★★★☆

生態

ヤドリコテライゾナは人間の頭部に憑くイゾナ科の一種である。植物のような容姿をしているが、頭部に侵入している根のような部分は血管と一体化しており、動物性の生態を持つていることが分かる。この禍は憑いた人間の「他人に頼りたい」という欲求を刺激する物質を血液に流し、他人への依存関係を作る。そうすることによって生まれた「関係を維持しようとする欲求」を摂取しているのである。他人との新たな関係性を探すことは健全であるが、このように既にある関係性に固執するのがこの禍に憑かれた人間の特徴にもなっている。非常に容姿の似ているヤドリコテライゾナとの関係性が古くより調査されているが、未だにはつきりとした関係性は発見されていない。

他人に頼る能力というものを人間は元より持つているが、人間関係への依存というものはこのヤドリコテライゾナがもたらすものである。「依存」という概念の定義は難しく、元より人間の持つている能力も広義の「他者への依存」であるが、ここでいう「依存」とは「不禍な人間の在り方に逆行するもの」であり、具体的には「冷静な思考能力を奪うもの」と定義して間違いはないだろう。ヤドリコテライゾナの項で述べた、支持する人間が違うことよって起こるいさかい・他人に入れ込むことよって行う逃避・人気という指標による判断基準の侵害等が「不禍を指摘す思考能力」を越えて行われた場合がそれである。他人を支持するときに元々支持した理由を忘れて支持し続けたり、他人に入れ込む際に楽しみの範疇を越えて苦しみを悪化させる結果を招いたり、人気というものの信頼が自分個人の判断基準への信頼を越えてしまったりするということである。

対処法

このヤドリコテライゾナは成長した人間にも憑くタイプの禍である。人間が元々持つている「他人に頼りたい」という欲求の大き

さには個人差があり、それが大きい人間はこの禍に憑かれやすい。ただし憑かれてからこの禍を成長させてしまう人間には共通点があり、それは「関係性をなるべく単純化して考えようとする」という点である。人間同士の関係性とは本来複雑なもので、どちらも人間である限りはその関係性を完全に表すことは当事者同士でもできないことなのである。それを知ることが様々な（自分とは合わないような）人間との接触の質と量よって行われる。それが足りなり場合は前述のような考え方になり、結果としてこの禍を成長させてしまうのである。よってこの禍への対処法は人生における他人との関係の質と量を高めることである。ちなみに必ずしもその両方が必要であるわけではなく、集中力の高い人間はその質を高めることに向いていて、勘のいい人間はその量を多くすることに向いている。

